

聖書:ホセア書5章8～15節

説教:確かに起こることを告げる

はじめに

ホセアは紀元前760年に北イスラエルで預言者と召され、当時国中にはびこっていたバアル礼拝を止めて、聖書の神に立ち返りなさいと繰り返し語り続けます。しかし人々はホセアのことばに耳を貸そうとせず、ますます高慢になり、正義をねじ曲げるようなことを平然と行って恥じません。その結果、どうなっていくのか。それが今日の箇所にかかれてあります。「エフライムは虐げられ、さばかれて打ち碎かれる。」ようは国が減んでいくということです。それはどのようなことであつたのか。神がホセアを通して語ったことばに耳を傾けてまいります。

1 北イスラエルと南ユダ

1) エフライム

まずここに出て来る地名についてです。エフライム、これは北イスラエルの別の呼び方で、ベニヤミンは南ユダの一番端にあつて、北王国イスラエルとの国境線を接している。ギブア、ラマ、ベテ・アベン、これらはすべて北と南の国境線付近にある町です。

そのことをおさえてから8節を読みましょう。「ギブアで角笛を、ラマでラッパを吹き鳴らせ。ベテ・アベンでときの声をあげよ。ベニヤミンよ、うしろを警戒せよ。」ベニヤミンのうしろとは、国境線で接している北王国イスラエルのことです。ユダのみなさん、北イスラエルを警戒しなさいと言うのです。どうしてか。9節前半。「エフライムは懲らしめの日に、恐怖のもととなる。」やがてエフライムが懲らしめを受ける日が来るからだと言うのです。

2) ユダ、ベニヤミン

それでユダの人々はどうしたか。素直にホセアの警告を素直に聞けばよかったのですが、残念ながらそうはいかなかった。10節。「ユダの首長たちは、地境を移す者ようになった。わたしは彼らの上に 激しい怒りを水のように注ぐ。」日本では、一つ一つの土地は法務局の登記簿に登録されていて、それにしたがって地面には地境を示す標識が埋められています。これを勝手に動かしてはいけません。聖書の時代も同じです。当時は標識として石を使っていたので動かそうと思えば勝手に動かすこ

とができる。もちろんそんなことをしたら律法に違反です。ところがユダの首長たちは勝手にそういうことをしていた。霊的にも墮落し、公義と公正がないがしろにされるようなことがあからさまに行われていくようになれば、聖書の神を捨てることは簡単です。そうやって自分たちを喜ばせてくれる他の神々を拝んでいく。北イスラエルのことから学べと言われたのに、結局南ユダも同じことを繰り返して行くのです。

2 バアルを拝む者の行く末

1) エフライムはアッシリアに行く

さてでは、「エフライムは懲らしめの日に、恐怖のもととなる」とはなにか。ただの脅しの文句ではありません。そのヒントは13節中間にあります。「エフライムはアッシリアに行き、大王に人を遣わした。」アッシリアとは、当時、世界で最も大きな力を持っていた大帝国で東はユーフラテス川から西は地中海にまで及び、支配地域を拡大するためにしばしば北イスラエルに圧力をかけてきます。でも北イスラエルはアッシリアに比べたらとても小さくて、まともに戦えるような力はない。けれどもなんとかアッシリアが攻めてくるのを防ぎたい。こんなときどうするか。

2) 難を逃れたが(列王記第二15章19～20節)

その時の様子が列王記第二に書いてあります。かいつまんでいうとこういうことでした。ちっぽけな北イスラエルがアッシリアを敵にまわすことなど考えられない。そうだここは逆転の発想でいこう。アッシリアを味方につければいいではないか。ついでに、何かあつたときに守ってもらうことにしたらどうか。もちろん、ただというわけにはいかない。贈り物をしよう。それで全国から銀を集めてアッシリアに貢いだ。その結果、アッシリアは機嫌をよくして自分の国に帰って行ったということです。

みなさん、これをどう評価するでしょうか。お金を渡すのがよかったかどうかは議論が分かれるところですが、とにかく一滴の血も流さずに平和的に解決できた。おまけに有事の際には、軍隊を出して守ってくれる約束までとりつけ、難しい交渉をよくやり遂げた。多くの人たちは前向きに評価した。ホセアが5章で語ったとき、アッシリアとの

関係は落ち着いています。だれもこれを疑う人はいなかった。

3) 確かに起こることを知らせる

では、いつまでも安心していられたのか。13節後半。「しかし、彼はあなたがたを癒やすことができず、あなたがたの腫れものも治せない。」彼とは、アッシリアの大王のことです。アッシリアと同盟を結んだときはこれで一安心、もう大丈夫とあなたがたは思っているかもしれないが、それは間違い。なぜなら9節後半。「わたしはイスラエルの諸部族に、確かに起こることを知らせる。」11節。「エフライムは虐げられ、さばかれて打ち碎かれる。」

確かに起こることを知らせると言っておきながら、実際は起きなかったなら、聖書は信じられなくなります。本当にそんなことが起きたのでしょうか。確かに起きました。同盟を結んでから十年ほどたったとき、アッシリアは手のひらを返すようにして北イスラエルに攻め来て、人々は補囚として外国に連れ去られ、国を滅ぼしてしまいました。考えてみればあたりまえです。アッシリアが恐い顔をして北イスラエルを脅かしてみたら、びくびくしながら結構な金額の金（かね）を差し出してきました。一度隙を見せてしまったらもう終わりです。母屋が取られるのは時間の問題でした。バアルの神々を信じる政治家たちは、敵に銀を渡すという間違った判断をしてしまい、結局自分たちを救うことはできず、さばかれて打ち碎かれてしまいました。

本当はどうすべきだったのでしょうか。お金では解決できません。人の決めごと、知恵によってもできません。バアルの神々により頼んでいるかぎり解決はない。聖書の唯一の神しか助けることができない。だからバアルから離れて神に立ち返り、神に寄り頼みなさいとホセアは語るのです。

ユダは北イスラエルが滅ぼされていくのを見ていたはずですが。神からは、「ベニヤミンよ、うしろを警戒せよ」とも言われていました。けれども残念ながら、南ユダも結局北イスラエルと同じような道を歩んで滅んでしまいます。

このことから私たちは大切なことを学ぶことになります。何を信じるのかによって、一つの国が立つか倒れるのかが決まってしまう。大げさに聞こえるかもしれませんが、80年前の日本は天皇を神であると言って近隣の国々に傲慢なふるまいをし、挙げ句の果てに勝つ見込みのない戦争をしかけ、本当に一つの国がなくなる寸前までいきました。

た。今は大丈夫なのか。憲法で政治と宗教は別々という建前にはなっています。でも有力な政治家が堂々と伊勢神宮や靖国神社に参拝し、新興宗教とも結びついているのを見れば、とても安心してはいられません。

3 わたしの顔を慕い求めるまで

1) わたしは戻る

14節に「このわたしが引き裂いて歩き、さらって行くが、助け出すものはだれもない」とあります。神の懲らしめでとどめを刺され、助け出すものはだれもない。このままでは、どこにも救いはないかのように見えます。しかし15節にこうあるのです。「わたしは自分のところに戻ってしよう。彼らが罰を受け、わたしの顔を慕い求めるまで。彼らは苦しみながら、わたしを捜し求める。」

わかりやすく言い直せば、こうです。神はいちど北イスラエルと南ユダを懲らしめるために出て行ったけれど、いつまでもというのではない。神は、元のところに戻ってあなたがたが立ち返るのを待っている。つまり、救いの道はなお残されているということです。

2) 罪を知り、神を求める

では神はなぜ私たちを懲らしめるのか。もちろん懲らしめられるような罪を犯したからということですが、そればかりではない。もっと積極的な意味がある。懲らしめを受けたらだれだって苦しみます。苦しくなると人は考えます。どうして自分はこうなってしまったのか。ああそうか。バアルを拝んで高慢になり、それで人を傷つけ、誤った判断をし、国を失ってしまった。自分の罪がすべてを狂わせてしまった。そんなふうにして、自分の罪に気がつく。そのとき私たちは祈ります。主よ、このような者をあわれんでください。救って下さいと祈り始めます。神はその瞬間を待っておられます。わたしを捜し求める者を決して見放さない。あなたを救い、助け出し、あなたの傷を癒やして、力づける。そのために神は何をするのか。わたしのひとり子であるイエス・キリストがあなたのためにいのちを捨てて、あなたの罪を代わりに背負うから、安心してわたしのところに戻って来なさい。

神はこれから起こることをすべてご存じです。その方が、主に立ち戻れと言われます。私たちは真実なる主とともに歩んでまいります。